2025/1/5

ルカの福音書　講解メッセージ㊳

『ルカの福音書 16 章 1-13 節　不正の富で友を作れ』

■不正の富で友を作れ

「イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、物ごいをするのは恥ずかしいし。ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか』と言うと、その人は、『油百バテ』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい』と言った。それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか』と言うと、『小麦百コル』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい』と言った。この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。」（ルカ 16:1-8）

イエス様は弟子たちに、ひとりの管理人の話をされました。不正によって職を失うことになった管理人は、さらに不正によって、彼らに恩を売りました。いざという時、自分を迎えてくれる場所を作るためです。

人は、良い人間関係を築くことに、心を尽くしています。つらい時に、話を聞いてくれたり、助けてくれたりする友は、私たちにとって避難場所になるからです。

不正な管理人は、抜け目なく不正の富を使って、いざという時のための避難場所を作り、主人にほめられました。

「そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」（ルカ 16:9）

この話は、弟子たちに対して語られています。つまり、クリスチャンに対して語られているということです。クリスチャンにとって、不正の富とは何でしょうか。友とは誰のことでしょうか。

さらに、この話は、放蕩息子のたとえのすぐ後に語られています。この点に注意すると、話の流れがよくわかるようになります。

ここでの「友」とは、永遠の住まいに迎えてくれる方、つまり神ご自身です。（ルカ 16:9）父と子と聖霊、三位一体の神が、すべてを失ったとき、あなたを永遠の住まいに迎えて入れてくださる友なのです。

つまり、神を友としていれば、いのちを失ったとき、神はあなたを友として天の御国に迎えて入れてくださるということなのです。クリスチャンは皆天国に行くことができます。しかし、友として迎え入れられる関係を築いて天国に行くことができるなら、それはなんという喜びでしょう。

では、「不正の富」とは、何でしょうか。不正とは、神の意に反することです。アダムの罪によって死が世界に入り、この世は終わりのある時間の中を生きる世界になりました。本来、いのちは永遠であるはずなのに、有限の時間の中に閉じ込められてしまったのです。終わりのある時間は、神の意に反するものです。ですから、この世の時間は「不正の富」と呼ばれます。

終わりがあることを有限性と言いますが、私たちは、この有限性の世界で自分の能力を生かして可能性を探し、避難場所を作ります。しかし、この世の時間を使って手に入れるものは、必ず終わりが来ます。お金も、地位も、人からの評価も、すべて残りません。

イエス様は、「残らないもののために時間を使うのではなく、残るもののために使いなさい」と教えておられるのです。いつまでも残るものは、信仰と希望と愛です。不正の富を使って自分のために友を作るとは、この世の時間を使って、神との関係を築きなさいということです。

「私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行いによって義と認められたではありませんか。あなたの見ているとおり、彼の信仰は彼の行いとともに働いたのであり、信仰は行いによって全うされ、そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。」（ヤコブ 2:21-23）

アブラハムは、この地上での時間をうまく使って、神との関係を築きました。神のことばを聞き、それをコツコツと実行し、最後に、「イサクを捧げよ」という神の言葉にも従いました。この時、神はイサクがほふられる前に止めてくださったのでイサクが死ぬことはありませんでしたが、とにかくアブラハムは、神のすべての言葉に忠実に従い、その結果、神の友と呼ばれるようになりました。これが、不正な富を使って、神から友と呼ばれる関係を築いたということです。

■神の友となれ

「小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。」（ルカ 16:10）

不正の富で友を作る、すなわちこの世の時間を使って神の友となるために、続けて教えられていることは、小事に忠実であれということです。小さなことを忠実に積み重ねることが、神との関係を築く道です。

一週間 168 時間のうち、礼拝の 2 時間を神にささげること。受けているものの一割を献げること。日々、神に感謝を向けること。これらは小さなことですが、心を神に向ける大切な積み重ねです。

これらのことをていねいに積み上げていくことで、私たちの心はしっかりと神に向くようになり、神と良好な関係を築けるようになっていきます。

「ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」（ルカ 16:11-13）

12 節では、「不正の富」を「他人の物」と言い換えています。不正の富とはこの世のもの、つまり、悪魔の物だからです。この世界に悪魔が死を持ち込んで、すべて死ぬものとなったので、この世のものはすべて悪魔のものになりました。悪魔のものを神の国に持ち込むことはできません。神の国では、この世のものではなく、本来私たちが持つべきものを持てるように、神は用意してくださっています。

放蕩息子のたとえの中で、神と共にいた兄息子に対して「私のものはすべてお前のものだ」と神は語っておられます。私たちは本来神のものをすべて持っているのです。神があなたのすべてを支え、あなたは神と共に生きているということです。

ところが私たちは、神を無視し、神を持っていない生き方をしています。神に愛されているのに、そのことに気づいていないのです。

神はあなたを愛しておられます。神の前にはあなたしかいません。なぜなら、世界にあなたは一人しかいないからです。神にとってあなたは、人間というくくりの中の一人ではなく、あなたというたった一つの存在です。ですから、神はあなたと向き合うとき 1 対 1 で語られます。それがキリストのからだの器官ということであり、単独者ということです。

神の前には、あなたはたった一人の存在であり、神に支えられ、人と比較されることもなく、神のものをすべて持っているのに、あなたはそのことに気づいていないのです。自分はそれほど素晴らしく高価で尊いということに気づいていないのです。神の友となるということは、それに気づくようになるということです。私とイエス・キリストはいつも一緒であって、私は神の友なのだと気づくのです。そのために、この世の時間を無駄に過ごさず、神に言われたことを忠実に実行していくよう、教えられています。

放蕩息子のたとえの中で、人と自分を比べて、神の愛に気づかなかった兄に対して、父親は次のように語っています。

> 『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』
>
> （ルカ 15:31-32）

このあと兄がどうなったのか、聖書は語っていませんが、この続きとして「小事に忠実になるように」と教えられているのは、これが神とのかかわりの中で自分が愛されていることを知る道だからです。

■神との関係の中で自分を知ること

「しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」(ルカ 16:13)

放蕩息子の兄は、不正な富を求めていました。それは人との関係の中で自分を知ろうとする生き方です。そうではなく、神との関係の中で自分を知りましょう。兄は、両方をやろうとしたので、つぶやいてしまう結果になってしまいました。

人との関わりの中で自分を知ろうとするとは、人と自分を比較するということです。イエス様の弟子たちもいつも誰が一番偉いかと競っていました。もちろん神を信じていたので、彼らは神との関係でも自分を知ろうとしていましたが、そんなことはできないのです。なぜなら、人との比較の中で自分を知ろうとすると、かならず自分はだめだという結論に行きつきます。どんなに自分を高くしても自分よりも上の人は必ず出てきます。金メダルを取ってもその記録はいつか破られ、どんなに有名になってもあなたを抜く人が現れ、結局は忘れ去られます。人との関わりで自分の価値をはかると、最終的に出る結論は、自分はだめなもの、価値のないものということになるのです。しかし、神の前では違います。あなたは一人しかいません。だから宝です。

ふたつの価値観の両方でよい評価を求めようとすると、どちらの意見に従えばよいのか、悩むようになります。

「あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。」(Ⅰコリント3:3)

この世界からどう思われるかで自分の価値をはかろうとする生き方は、肉に属するクリスチャンの姿です。パウロは、そこにはねたみや争いがあると言いました。人との関わりの中で自分を知ろうとする生き方だからです。しかし、それは間違った方向です。

御霊に属するクリスチャンは、神との関わりの中で自分を知ろうとします。パウロが語りたかったことは、私たちは神の畑であり、神の建物であるということです。つまり、神が建てる場所があなたであり、神との関係を築く場所があなたなのです。神はあなたを耕し、あなたは神との関係を築いていきます。神の畑は一つです。ところ

が、私たちはしばしば神の畑ではなく、人の畑に入ろうとしてしまいます。だから御言葉を食べ、神の畑にとどまりましょう。

人は、人からほめられることを求め、人の言葉の実を自分で収穫しようとします。しかし、私たちは神の畑であって、神が育てるものを収穫する場所です。神が育てるものは、信仰と希望と愛です。この収穫だけがいつまでも残ります。これこそが、本来私たちが持つべきものを持つようになるということです。

そのためには、どっちつかずの生き方はもうやめて、この世の時間を有効に使い、神との関係を築きましょう。礼拝の 2 時間から始め、小事に忠実に歩んでいきましょう。それが神の友となる生き方です。神の友となるとは、自分の真実な姿を知るようになることです。行いや能力とは関係なく、神に無条件で愛されている姿です。神を友とすると、そのことに気づくようになります。